2022年5月15日･佐土原キリスト教会･礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書7章1～13節
説教題：聖く生きるとは

3月に召天された兄弟が、1月の礼拝でお証しをして下さいました。今から思えば、私達に対する信仰の遺言を残して下さったように思います。私は、兄弟のお証しの中で、特に2つのことを印象深く聞きました。1つは、兄弟がキリスト教に心を開くきっかけになった映画の話です。その映画を見て「自分を犠牲にして1人の人を愛し抜いた宣教師の姿に心が動いた、犠牲的な隣人愛に心動かされた」と言われたことです。もう1つ、印象深く伺ったのは、ご自身の長い人生経験を通してしみじみと語られた「人は罪を犯さずには生きて行けないのですよ」という言葉です。私達は、罪を犯さずには生きて行けないという現実を忘れることなく、だからこそ、「愛を生きる」という生き方を選んで行くことが大切であること、そのようなことを、兄弟の遺言として心に刻みたいと思うことです。

今日の箇所も、正にそのようなことが語られる個所です。「内容」と「メッセージ」に分けてお話しします。

1. 内容～神の御言葉に聞こうとしない信仰の偽善

ガリラヤで伝道しておられたイエス様の活動が評判になっています。エルサレムの最高議会は、「自分達の許容出来る信仰を教えているのかどうか」、パリサイ人･律法学者という専門家を調査団として派遣して来ました。やって来た彼らは、直ちにイエスの弟子達に誤りを見つけました。弟子達が、食事の前に手を洗わなかったのです。「食前に手を洗う」というのは衛生のためではありません。「宗教的な汚れ」を清めるという意味がありました。宗教的に汚れると神に近づくことが出来ない。例えば街で人ごみの中に入ると色々な人と触れ合います。彼らにとって、異邦人は全て「汚れた人」でした。またユダヤ人の中にも、彼らにとって「汚れた人」がいました。「汚れた人」に触れて、自分も汚れたかも知れない。だから彼らは、街から帰って来ると体を洗い、食べる前には手を洗ったのです。「手を洗う」と言っても儀式的な「手洗い」です。「洗い方」まであったのです。とにかく彼らにとっては、それが「汚れ」から身を守ることであり、「神を信じる者」が当然すべきことだったのです。

しかし聖書には、「儀式に従って手を洗うように」等という戒めはありません。それは、5節に「昔の人たちの言い伝え」(5)とあるように、人が作った決まりなのです。そんな決まりが無数にあったのです。そして当時、その「人が作った決まり」を型通り行なうことが何よりも大切になっていた、それが信仰になっていたのです。「あるユダヤ教の教師(ラビ)が何かの理由で牢に入りました。牢の中で出される水は、渇きをしのげる程度の量でした。しかし彼はその水を、手を洗うために使ってしまい、渇きのために死にかけた」と言います。「手を洗う」ということがそれほど重要なことになっていたのです。その「手洗い」を、イエスの弟子達はしなかったようです。なぜイエス様は、弟子達に手を洗うように教えなかったのか。と言うか、おそらくイエス様は「弟子が手を洗おうが洗うまいが、頓着されなかった」のだと思います。そんなことは大事なことではないからです。

彼らの質問に対してイエスは、彼らを「偽善者」と呼んで反論しておられます。挑戦的な言葉です。なぜ「偽善者」なのか。9節「『あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている』…『あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです』」(8～9)。「あなた方は信仰を大切にしているようで、実は『神の戒め(神の言葉)』を捨てている」と言われるのです。イエスが挑戦的なのは、彼らが神の言葉を無にしている現実に怒っておられるからです。

その例として取り上げられているのが「コルバン」の話です。例えば、神の御心は「十戒」の中にはっきりと示されています。「あなたの父と母を敬え」(出エジプト 20:12)。加えて「自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない」(出エジプト21:17)とあります。要するに「父と母を大切にせよ」というのが神の御心なのです。ところが当時、そこに―(「手洗い」と同じように人が作った)―「コルバン」という決まりがあったのです。詳しく分からないのですが、例えば父母に必要があって子供にお金の援助を頼んだとします。子供はお金を持っている。神の言葉によって父母を大切

にする義務がある。しかし出したくない。そういう時、「これは、お父さん、お母さんのために使いたいのですが、『コルバン』です」と宣言すると、それは「神のために使うもの」と決まってしまい、父母のために使うことが出来なくなった—(使わなくて済むようになった)—のだそうです。ユダヤ社会では「神のため」と言われたら、親だろうが言い返すことは出来ません。「コルバン」の決まりを大切にすることによって、「父と母を大切にせよ」という「神の御心(戒め/御言葉)」を無視することが出来たのです。そういうことが律法学者やパリサイ人の指導の下で教えられ、行なわれていたのでしょう。

そうやって人間の作った決まりを大事にしながら、肝心の「神の御心」が無くなってしまった信仰、神の御言葉に聞こうとしない信仰、しかも自分達では「信仰的だ」と思っている信仰、それをイエスは、「偽善」と言われたのです。「信仰とは神に聞くことだ」と言った人がいます。「神の御言葉に聞き、従う」という思いがない時、信仰は「偽善」に陥るのです。

2. メッセージ～罪を問う故の愛に生きる選択

ユダヤ人の教師(ラビ)とカトリックの司祭のこんな会話があるそうです。ジョークです。ある結婚式のパーティーに 2 人が同席しました。料理の中には豚肉を使った料理がありました。ユダヤ教のラビは、豚肉を食べません、禁じられています。カトリックの司祭が言いました。「どうしてこんな美味しいものを食べないのですか。神が造られたものを食べないのは罪だとは思いませんか」。ラビが言いました。「食べて上げますよ。あなたの結婚式にね」。カトリックの司祭は、結婚を禁じられています。ですからラビは「なぜ結婚しないのか」と皮肉で言い返したのです。私達は豚肉も食べるし結婚も禁じられてはいない。だからこのラビと司祭の話もどうということはありませんが、何が言いたいかというと、このパリサイ人・律法学者とイエスとの物語も、私達が「自分には関係がない」と読み過ごしてしまうとしたら、問題だということです。確かに「コルバン」とか、そういう議論は、私達には縁遠い話のような気がします。神に何かを捧げたからと言って、それで父母への責任を免れるというようなことは、私達の社会では通用しないし、教会もそのようなことは教えません。しかし、だからと言って、私達には関係がないのか。いや私達には、この箇所を通して自らに問わなければならないことがあると思います。それは、パリサイ人・律法学者は、その方法、信仰の生き方において決定的に間違っていた。しかし私達が問われることは、彼らが神の前に聖くあろうとしたほどに、私達は神の前に聖くあろうとしているのか、ということです。「聖くなければ、だれも主を見ることができません」(ヘブル 12:14)という御言葉もあります。私達は、神の前に聖くあろうと気を配っているでしょうか。

聖くあるとは、どういうことか。それは食前に手を洗う等ということではありません。それは、ここでイエスが教えておられるように、神の言葉を無にしない、神の言葉に生きようとすることではないでしょうか。もし私達の中に、真摯に神の言葉に生きようとする思いがなければ、それは「イザヤ書」が預言することが私達に向けられるのです。「この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから」(6～7)。この教会の信仰告白にも「聖書は…信仰と生活に関する全く信頼し得る案内書であり、また唯一の権威ある啓示(示し)である」とあります。私達の中に神の言葉によって生きようとする思いがなければ、それは、「その心は」神から離れていることになります。神の言葉よりも「人間の教え」—(世の常識、人の評判・言葉、自分の感情、損得…)—を基準にして生きるとしたら、「わたしを拝んでもむだなことである」と、「口先」だけの信仰になっているのではないかと、主は言われるのです。

では、神の言葉(戒め)とは何でしょうか。イエスは神の言葉(戒め)の代表として、ここで「父と母を敬う」ということを挙げておられます。「神の御心(戒め)は、父母を敬うということであり、それに生きることが神の言葉を生きることであり、神の前に聖くあることだ」ということでしょう。「『父母を敬え』と言われても、もう父も母も召されている」と仰る方も多いでしょう。父母との関係と言うのは、人間関係の代表例として捉えれば良いと思います。使徒パウロは言いました。「『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは、『あなた

の隣人をあなた自身のように愛せよ』ということばの中に要約されているからです」(ローマ 13:9)。神の言葉(戒め)に対して真実に生きようとすることは、そのまま人に対して真実に生きようとすることだ、と言えるのではないでしょうか。ある神学者は次のように言います。「イエスにとって…人が神を愛していることの唯一の証明は、人が他人を愛することによる」(バークレー)。

イエスは、神の言葉が無にされている現実に怒りをもってパリサイ人・律法学者に向かわれました。そして私達にも「神の御心を生きるように」、人に対して真実の愛で接するように、それを私達の生きる現実の中で、父母と、家族と、隣人と関わるその只中で、挑戦するように—{「あなたの隣にいる人を、あなたが関わる人を、真実の愛—(精一杯の愛)—で愛して行きなさい」と}—薦めておられるのです。それが神の前に聖い生き方なのだ、と言われるのではないでしょうか。聖書は言います。「キリスト・イエスにあっては…愛によって働く信仰だけが大事なのです」(ガラテヤ 5:6)。{「大切なのは愛を通して表される信仰だけです」(ガラテヤ 5:6 英語訳)}。マザー・テレサは言いました。「この地上で神と共にある幸せを享受するためには、神が愛されているように人を愛することが必要です…」(マザー・テレサ)。愛に生きる時、私達は神を近くに感じるのではないでしょうか。

しかし問題は、「そのように愛することができるのか」ということです。「コルバン」、「親に捧げないで神に捧げると言った」、そのものは、その後どうなるのでしょうか。学者の間に 2 つの見解があります。1 つは「それを神に捧げることは無期延期にすることが出来た」という意見です。もう 1 つの意見は「『コルバン』と言ったら、本当に全部を神に捧げてしまわなければならなかった」という意見です。そうすると、親に上げたくないばかりに神への捧げものにしてしまったということになります。どちらにしても、人は、父母をそれほど愛さないことが出来るということです。そこに見えて来るのは「愛に生き得ない」という人間の罪の姿ではないでしょうか。

私は、今日の御言葉を読むと心が刺されます。イエスは「父や母をののしる者は死刑に処せられる」(10)という御言葉を取り上げておられます。「これが神の御心(掟)なのだ」と言われたのです。先日も申し上げましたが、私は自分の婚約式の時に、人の目を恐れて、見栄えを良くしようとして、自分の願ったような用意をしてくれなかった母を激しく責めたのです。思い出しても情けなくなるほどです。「旧約」の律法で言えば死刑です。私が特別に罪深い、ということかも知れませんが、しかし、私という人間は、自分に直接関わることのためには、父母でさえ罵る者である、そのことを知っています。だから、「コルバンです」と言って親を蔑にする、そういう人間の罪を、自分のこととして思わされるのです。

どうでしょうか。私達は、神が願っておられるような愛、そのような愛をもって父母のことを思い、父母に関わって来たのか、父母を愛したか、そのことについて「はい」と胸を張れないものが、もしかしたらあるのではないでしょうか。申し上げたように、ここで「父母」は隣人の代表です。例えば家族に対して、神の喜ばれるような愛を持って接して来たのか、接しているのか、問われます。私も、良い時は良いですが、何かあると家族を愛せないのです。愛せない現実に、自分の罪を見せられます。

三浦綾子さんが「死んでもキリスト教は信じない」と言っていたのに、色々なクリスチャンとの出会いを通してキリスト教信仰に惹かれ始めた時、彼女の信仰を決定づける出来事がありました。彼女が入院していた札幌の病院に昔の婚約者が訪ねて来るようになったのです。彼はもう結婚していて奥さんがいました。三浦さんには前川さんという恋人がいました。しかし、昔の婚約者が毎日訪ねてくれると、何かと便利なので、そのことを何とも思わなかったのです。後になって、自分が彼の奥さんの立場だったらどんなに傷つくか、そのことに罪の自覚がなかった、そのことの罪深さに愕然とするのです。自分の罪に本当に気づいたこと、それが彼女の信仰を導いて行くのです。「コルバン」の話が一番の問題として提示するのは、私達が、神が願っておられるような愛に生きることが出来ないという、私達の「罪」の問題ではないでしょうか。そして 1 人びとりがその自分の罪の問題とどう真剣に向き合うか、そこに信仰者として生きることの最大のポイントがあるのではないでしょうか。教会を作るのも罪意識です。

しかし、自分の罪と真剣に向き合った時、イエスを求める者には、慰めが、励ましが、救いがある

のです。私達は罪を抱え、人を愛する愛も自己中心にまみれているような者です。しかし私達が、そのような弱い者だから、「自分の良さ」等というものではとても神様に受け入れられる者ではないからこそ、私達の罪、自己中心、全部を背負ってキリストが十字架で私達の罪の裁きを受けて死んで下さったのです。だから私達は、罪はある、神の求める生き方は出来ない。しかし、ただ「イエス様の十字架の赦しを信じます。こんな私を憐れんで下さい」と言うことによって、神は私達を受け入れて下さるのです。私達の礼拝も、十字架があるから、「聖いもの」として、神は受け取って下さるのです。そして私達は「こんな私を神は受け入れて下さっている」と知るから、「『わたしの目には、あなたは高価で尊い』(イザヤ 43:4)と言って下さる」と知るから、だから、少しでも神の言葉に生きて行こう、少しでも神の愛に生きて行こうとするのです。

その時、私達にはさらに励ましがあります。イエスは言われました。「…わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします…」(ヨハネ 16:7)。先日、あるクリスチャンの方から聞きました。その方が車を運転していたら、突然、涙が溢れて来て車を運転することが出来なくなったそうです。「神様に大切にされているんだ」という暖かい思いが湧いて来た。そしてその愛されている愛を分かち合いたいと思ったそうです。聖霊に触れられたのです。イエス様の十字架によって、イエスを信じる者には聖霊(助け主)が与えられるようになりました。聖霊が助けて下さり、聖霊なしには出来ないことを、出来るようにして下さるのです。神の御心に踏み出そうとする時、私達は、隣人を愛するための助けを得るはずです。もちろん失敗を重ねるでしょう。しかし、失敗しては、また神様を見上げて、御言葉に生きようとする、人に対して真実に生きようとする、その私達を、神は「聖い」と喜んで下さるに違いないのです。

3. 終わりに～神の言葉を空文にしない闘い

私は、ここでも「アーミッシュの赦し」のことを思いました。アーミッシュの村の学校に、近所の男が猟銃を持って押し入って、5 人の子供を殺して、自分も自殺しました。アーミッシュの人達は、その 6 時間後、犯人の妻の所へ行き、こう言いました。「私達は彼を赦します。あなた方も家族を亡くしました。悲しみを分かち合いましょう」。「それは『もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます』(マタイ 6:14)、あるいは『自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい』(マタイ 5:44)、それらのイエス(神)の言葉を無にしないための激しい戦いだったのではないか」、そんなことを教えられることでした。彼らは日毎に「神様、恵みによって御心を行わせて下さい」と祈ります。私達も、神の御心に、御言葉に、愛に生きることを、改めて心に刻みたいと思います。